

# 東日本事例発表オンライン発表会 エントリーシート

法人名	一般財団法人日本老人福祉財団	施設名	佐倉(ゆうゆうの里)
発表タイトル	ご入居者が主体となるコミュニティづくり (コロナ禍で行事が中止・縮小される中で入居者同士の交流をどのように持つか)		
研究の目的	施設行事を行う目的は、閉じこもりを防止し単調になりがちな生活を防ぐ、季節を感じる、感動することで脳を刺激し、病の予防効果につなげる、入居者や職員が集まることで会話をするきっかけをつくる、周囲とのコミュニケーションを活性化させることがあげられる。当施設では季節に合わせ様々な行事を行うことで職員や入居者の交流の場を設けてきた。しかし先が見えないコロナ禍では、感染予防が最優先され、当施設のような大きな施設ではどのように施設行事をすすめていけばいいのか判らなかつた。施設行事が中止・縮小されている間に入居者同士の交流の場をどのようにすれば、提供することが出来るのか、考え取り組んだ。		
発表の概要	令和2年2月中旬よりコロナ禍の影響を受け、例年行っている施設行事は中止・縮小開催となった。例年施設行事を行うことで入居者同士が関わる事が出来、交流の場を提供することが出来ていた。当施設は450名ほどの入居者があり、行事は常に70名から120名ほど集まる行事が主流だった。感染予防対策や先が見えないコロナ禍の中で、今までのような施設行事に頼ることなく、どうすれば3密を避け入居者が交流する場を設けることが出来るのか。また、コロナ禍の中、新入居者の交流の場を設けられるのか。現在施設で取り組んでいる「人材バンク」(趣味や特技を生かし誰かの役に立つことでの生きがい支援)やサークル活動の仕組みを活用しながら、交流の場を持つことが出来ないか入居者の力を生かすことが出来ないか、入居者の満足度も念頭に置き方法を検討、入居者の意見を聞きながら取り組んだ。		
研究方法	①人材バンクの登録者に情報やアイデアを提供してもらう。 各サークルのリーダーに感染予防のため中止していたサークル活動の再開の提案を行う。感染予防を考慮しながらどのようなことなら出来るか、入居者の力を生かし主体性を心掛け、交流活動できるよう支援していく。 ②経過の状況把握、参加された入居者、コロナ禍で入居された新入居者に聞き取りを行う。 収集期間:2020年3月~2021年1月		
成果・結果	①1回目の緊急事態宣言が解除された2020年6月より活動。 2020年2月中旬からサークルは中止していた。 人材バンク登録者A様は書道サークル・図書系の募集、 B様は外部で行っていた英語の勉強会、 C様は茶道教室を新たに立ち上げた。 サークル活動に関しては、消毒、換気、活動人数の制限等、ルールを作り、各サークルに提案、今までとは違った形式で活動を再開した。 参加人数が多い集まりはグループ分け、時間の短縮、感染予防を考慮した道具の見直し等協力を得ることが出来た。 感染予防が行えているか見回りや聞き取りを行ったところ、その中で人間関係についての相談や活動場所の相談などあったが上司に報告相談しながら方法を検討、アドバイスした。  自分たちで話し合う等、リーダーがサークルをまとめ問題を解決するなど主体性を持ち活動していた。 市内で感染者が増えると活動方法を見直したり、活動中止再開の判断は施設から提案しなくとも、ご入居者から申し出があるようになった。  ②サークル・勉強会は新たに立ち上げたものも含め35サークル中、26サークルが活動出来、交流の場を設けることが出来た。 また、コロナ禍に入居された方は行事がなく交流する場が持てないかと心配であったが、サークル活動を積極的に案内し、各リーダーと受け入れについて打ち合わせ・職員と一緒に見学するなど心細くない様配慮するなど対応した結果 新入居32人中20人の6割の方が参加し、心配していた新入居者のコミュニティのソフトランディングが可能となった。		
考察	人材バンク登録内容やサークル活動の状況、ご入居者のニーズなど把握しその情報を生かすことで、コロナ禍で施設行事が縮小・中止されていても、入居者同士の交流の場を持てることがわかった。また、職員のほんの少しの手伝いやアドバイスで、入居者自身が問題をその都度解決したことから、入居者の主体性を引き出すことが重要であることがわかった。  コロナ禍で施設行事を行えないことから始まった取り組みであったが、情報を生かし入居者の主体性を引き出すことが、コミュニティ作りには大切であり有効であると学んだ。これらの入居者の活動をブログなどで発信していなかったことが大きな反省点であり、今後の課題となる。今後も入居者のニーズや様子を把握し知恵をいただき入居者		

	と協力しながら、終の住処として満足して生活できる〈ゆうゆうの里〉になるよう、取り組んでいきたい。
<p>アピールポイント 伝えたいこと</p> <p>他のホーム・取組みと比較した 優位性など</p>	<p>施設行事の方法を変えコロナ禍での入居者の交流の場を設けた事例は多々あるが、入居者主体で交流の場をもつことに焦点を当てることが出来、入居者の満足感を得ることも出来た。また、特技や趣味を生かし入居者が主体となることで更なる生きがい支援にも繋がった。先が見えないコロナ禍だからこそ実現した取り組みであり、ホームに入居しても「やりたいことを実現できる」事例になったと考える。</p> <p>佐倉〈ゆうゆうの里〉は現在自立者は300名ほど(入居は450名)。お元気な方が「やりたいことが出来る」施設であること、要介護者と共存し支え合って生活し出来るよう、ご入居者が主体となるサークル活動に着目し、取り組みました。</p>
有老協以外での 本事例の発表・ 応募状況	